

2 研究の実際

(2) 本研究における創作指導の考え方と具体的手立て

ア 音楽の構成原理の知覚・感受をもとにした創作指導の工夫

音楽の構成原理とは、「反復」「変化」「対照」などの音を音楽へと構成するための原理のことです。大切なのは、何を、どのように「反復」「変化」「対照」させるかということと、そのことによって特質や雰囲気はどのように変わったかということの感受を関連付けながら活動に取り組ませることです。

「反復」「変化」「対照」によって、生み出される特質や雰囲気の例を示します（表1）。

表1 構成原理によって生み出される特質や雰囲気の例

反復	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安心感がある ・ 印象が強くなる ・ 盛り上がりを感じる ・ 安定感がある ・ 親しみがわく ・ 変化が欲しくなる
変化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 面白さを感じる ・ 緊張感が生まれる ・ 落ち着かない感じがする ・ 発展するようになる ・ 新鮮な感じがする
対照	<ul style="list-style-type: none"> ・ 面白さを感じる ・ 印象が変わる ・ 盛り上がる ・ 発展するようになる

例えば、動機を「反復」させたり「変化」させたりし、そのことで特質や雰囲気がどのようになったのか(または、変化したのか)という自分の感受を明らかにし、試行錯誤しながら、音を音楽へと構成していくこととなります。「動機を2回反復させたら物足りないが、4回だと変化が欲しくなる」「動機を3回反復させたら安定感がある」などと、生徒が音楽の構成原理を生かして、試行錯誤することと、その際に生まれる特質や雰囲気を感じることを繰り返しながら音を音楽へと構成することを実感できるような創作活動を展開することが大切です。

音楽の構成原理の知覚・感受を生かして創作の学習に取り組ませるときの工夫をいくつか例示します。

(ア) 身近な曲から構成原理を理解させる。

既習曲や生徒が知っている曲を取り上げ、曲の構成について理解を深めさせます。教科書掲載されている「エーデルワイス」、生徒が誰もが知っている「チューリップ」等、様々な曲で構成について学ぶことができます。例えば「チューリップ」では、1小節目の「さいた」を何回反復しているか気付かせ、どこで変化しているか、どのように変化しているかを考えさせることで構成原理を理解させることができます。このように「さいた」の部分の1小節が反復しているとも捉えられますが、「さいた さいた チューリップの花が」という4小節というフレーズが反復していると捉えることもできます。

生徒が普段聴いているJ-popなどの音楽にも構成の原理はたくさん用いられています。生徒が身近に聴いている音楽の中で、「サビの部分のメロディが何回反復しているか」「どこで変化しているか」といったようなことを考えさせることによって、「反復」「変化」「対照」などの構成原理が、身近にある様々な音楽の中にも使われていることに気付かせることができます。

(イ) 課題や条件を適切に設定する。

音楽の構成原理を生かした創作学習をスムーズに進めるためには、課題や条件を適切に設定することも大切です。設定する課題は、生徒が興味・関心をもって取り組むことができ、イメージしやすいものがよいです。また、条件は、使う音やつくる音楽の長さなど、生徒にとって分かりやすいものにすることが大切です。

例えば、反復したり変化させたりするもとなる短い旋律をつくらせるとき、「民謡音階や琉球音階の5音を用いて」、「ミソラの3音で」といったように、用いる音を決めると、創作学習の経験の少ない生徒にも比較的、取り組ませやすくなります。箏やアルトリコーダーなど、器楽の学習で身に付けている技能を把握した上で、例えば、アルトリコーダーの左手の運指だけで演奏できる音に限定するなど、生徒が試行錯誤しながら、音を選んだり、組み合わせたりする際に、器楽の技能の習熟が妨げにならないように配慮することも大切なポイントです。また、「4分の4拍子で2小節の長さ」といったように、拍子や長さなどを明確に示すことも考えられます。

初期の創作学習に取り組ませる際には、例えば、**表2**のようなリズム・パターンカードを準備し、その中から、自分のイメージと関わらせてリズムを選んだり組み合わせたりすることで、つくらせることも考えられます。

表2 リズム・パターンカードの例

また、反復させたり変化させたりしながら、構成原理を生かした音楽にしていくことをねらいとする場合は、あらかじめ、用いるリズム・パターンを指定することもよいと思います。

(ウ) 構成原理を生かした創作のワークシート

図1は、①絵を見て場面を想像する→②絵の中の2人の登場人物のイメージに合う1小節の動機をペアでそれぞれつくる→③2つの動機を反復・変化させたり、重ねたりして、場面のイメージに合うような音楽をつくるという学習活動のために準備したワークシートです。

階名とリズム呼称を分けてカタカナで記入させることができ、五線に記譜することが難しい生徒も簡便に作品を記録することができます。また、2人の登場人物のパートを上段と下段に分けて両方とも記入させることで、自分のパートだけでなく、2つのパートの関わりを視覚的に理解させることができます。動機を反復させたり変化させたりして自分の旋律をつくりながら、相手と掛け合いにしたり、重ねたり、イメージと関わらせて試行錯誤しながら、曲全体を見通して創作活動を進めることができます。

図1 ペアで音楽をつくらせるワークシート

	ツー ツー ツー ウン		ツー ツツ ツー ウン	
	ラ ド レ ●		ラ ドドレ ●	
		ツーー ツーー		ツーー ツーー
		ド ラ		ド ラ
	ツツ ツツ ツー ウン	ツツ ツツ ツツ ツー	ツー ツツ ツー ウン	ツー ツー ツー ウン
	ララ ドドレ ●	ララ ドドレド レ	ラ ドドレ ●	ラ ド ラ ●
	ツーー ツーー	ツーー ツーー		ツーー ツーー
	ド ラ	ド ラ		ド ラ

このようなワークシートを用いる際に、音高は楽器を用いて、音を探ることで記録できますが、リズムを記録することが難しいことが考えられます。普段から、前頁表2のリズム・パターンカードに示しているように、リズムをリズム呼称で読ませるような活動を日常的に行っていることで、この課題はクリアできるのではないかと考えます。さらに、♪=ツ、♪=ツーといったように、置き換えができるようになると五線に記譜することにもつながられます。

このように、作品の記録方法としては、五線譜だけでなく、文字、絵、図、記号などいろいろな方法が考えられます。他にも、コンピュータを用いて記録することもできます。生徒の実態に応じて、五線表記をしなくても記録できるようなワークシートを使用すると、五線表記や読譜が苦手な生徒にも意欲的に取り組ませることがができます。

図2は、創作の導入段階として、2小節の旋律をつくる活動をするときのワークシートです。リズムと使用する音をあらかじめ示し、音を選ばせることによって簡単に旋律を創ることができます。

図2 創作の導入段階のワークシート例

活動1

次のリズムに旋律をつけよう。「ラ ド レ」の中から音を選んでつくろう。
選んだら、気に入った音の動きになっているか、リコーダーで吹いて試してみよう。



レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	
ド	ド	ド	ド	ド	ド	ド	ド	ド	ド	●
ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	ラ	

イ 知覚・感受をもとにした創作指導と音楽科の特質を踏まえた言語活動

音楽科においては、創意工夫して音楽表現をする能力や味わって聴く能力を育成するために、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することを大切にした学習の充実を図ることが求められています。すなわち、〔共通事項〕を支えとした学習を展開しながら、知覚・感受したことを他者と共有したり、お互いに共感し合ったりしながら、表したい音楽表現を見いだしたり、音楽のよさや美しさを見いだしたりすることが大切となります。この過程において、例えば、表現領域では、どのように音楽表現したいのかという思いや意図を言葉で伝え合ったり、鑑賞領域では、音楽を聴いて価値などを考え、批評したりするなどの言語活動が重要な役割を果たすこととなります。

創作学習においても、その学習のプロセスや結果としての作品の共有の際に、言語活動は大切となります。その際の言語活動は、言葉と音や音楽によるコミュニケーションを大切にしたものであることが重要です。このことが、音楽科の特質を踏まえた言語活動と言えます。

また、創作の学習は、はじめから教材となる楽曲が存在する歌唱、器楽、鑑賞の学習とは異なり、自ら、音楽をつくり出していく学習であり、学習のスタート時点では、教材となる音楽が存在しない場合も考えられます。そのため、映像や絵から場面を想像させたり、生活体験と関わらせたりするなどして、表現したいイメージをもたせることが大切です。そのイメージを言葉で表すことによって、イメージが深まったり、確かなものになったりすることも考えられます。さらに、「こういう表現をしたい」という思いや意図を言葉で表したり、「この音楽にはこのような良さがある」といったことを言葉と音や音楽で伝え合ったりしながら、創作表現についての思いや意図を確かなものにしていくことも考えられます。

以上のように、創作指導においても、音楽科の特質を踏まえた言語活動を充実させることは大切なことであると言えます。

創作学習における「知覚・感受を深める」「言語活動を活性化する」「創作学習の質を高める」などの視点から、創作指導において、工夫してみてもどうかと考えることをいくつか例示したいと思います。

- (ア) 知覚・感受を深め、思いや意図の交流を活性化する工夫
- ・知覚したことと感受したことを言葉で表し、分けて整理したり、関連付けたりすることができるようにワークシートを工夫する。
 - ・「知覚シート」（知覚したことを正確に表現する言葉をまとめたシート）「感受シート」（感受したことを豊かに表現する言葉をまとめたシート）などを準備し、例を示すなどして、生徒の語彙を豊かにする。
 - ・創作表現についての自分なりの思いや意図を言葉で書き記すことができるようなワークシートを準備して、交流させることで「見える化」を図り、生徒同士の共有や共感を促す。
- (イ) 音楽科の特質を踏まえた言語活動にするための工夫
- ・実際に、楽器で音を出したり、口ずさんでみたりするなど、音や音楽を聴くことを通して確かめながら、創作活動に取り組みせ、思いや意図を伝え合う際も、言葉だけでなく、音や音楽を通したコミュニケーションとなるようにする。
 - ・作品を発表させる場面においては、作品のよさや工夫点について、学級内で共有した後に、

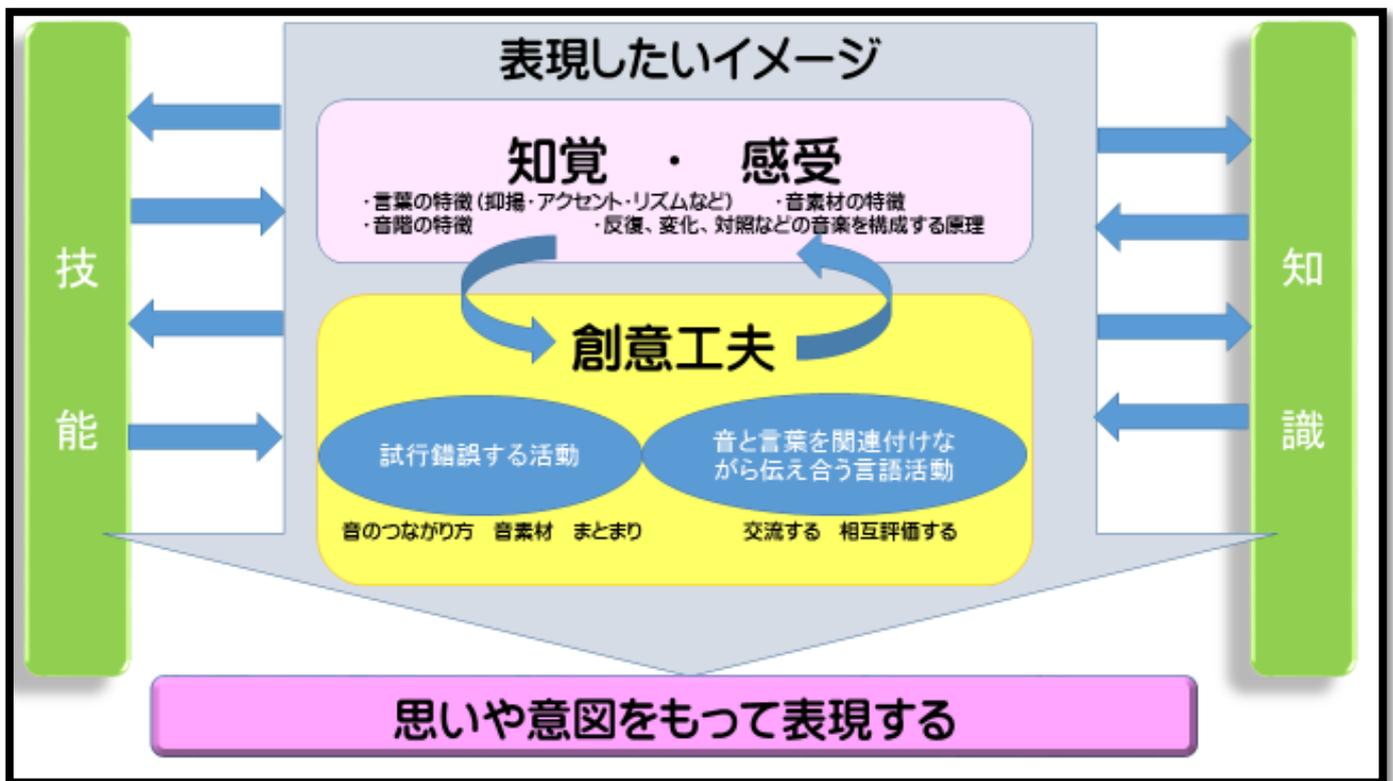
必ず、作品を再度、発表させるなどして、音楽を通して確認させる。

- (ウ) 創作活動の質を高めたり、生徒の満足感や達成感を高めたりする工夫
 - ・ I C T（ビデオカメラや I C レコーダー等）を活用して、創作の過程にある作品を録音・録画するなどして、第三者的な視点で視聴させ、工夫したことなどを確認させ、作品の質を高める。
 - ・ 生徒同士の間接発表や相互評価の場面を設け、互いに聴き合った音楽に対する様々な感じ取りがあることに気付かせたり、音楽の構造などを客観的に把握させたりしながら、一人一人の工夫や作品のよさに気付かせ、生徒の達成感や満足感を高める。

ウ 本研究における創作学習のプロセス

本研究における創作学習のプロセスを図3のように構想しました。

図3 創作学習のプロセス



表現したいイメージと関わらせながら、音のつながり方や反復・変化・対照などの構成原理などを、実際に音を出して試したり（試行錯誤する活動）、自らが抱いたイメージや工夫点などを伝え合ったり（音と言葉を関連付けながら伝え合う活動）する。このように創意工夫をしていく際には、常に知覚したことと感受したことを関わらせながら、学習を展開していく。その過程において、知識や技能を得たり、生かしたりしながら、思いや意図をもって創作表現をするに至る。

図3の創作学習のプロセスは、以上のような学習の過程を図示したものです。